

第二期 第六十六号 (初版) (無料)

# 音信不通

本のビオトープ

2022. 01. 20 定有堂書店 発行

## 二つの書評

『千年の読書』と『#千人の読書』

男性ブランコと鳥取と正体不明と

汽水のほとりから (10)

新聞は生き残れるか

英語独習法をめぐって

島・人・数学

Je monti (呪文)

鳥取あれこれ その六十五

八代日記 (二十二)

山椒魚とヴィオラ

しかく

拝啓、わたし

カエル姫 その二

…… 編集後記

奈良 敏行

三砂 慶明

ワクサカツウヘイ

小原 修治

萩原 俊郎

松田 裕史

芝野 浩貴

ムラカミヒロミ

内田 克彦

齊藤 仁昭

秦阜 梅林

森本 龍哉

三浦 永理

ドラメリア



## 二つの書評

奈良 敏行

(定有堂 店主)

新聞紙上で、最近紹介する機会のあった、二つの本の「書評」再録です。いずれも定有堂の棚づくりの核心となるものなのでお伝えしたかった書籍です。

『つながりの作法』綾屋紗月・熊谷晋一郎 NHK

出版

身体内外の情報を、細かく大量に拾いすぎて、外の世界と「つながり」にくくなった、という気がする人に読まれている。

最近、本屋の店頭で感じるのは、いままでの、常識を主語とした世界がひっくり返り、身体感覚を主語にした本が求められはじめている、ということだ。この流れの入り口に『つながりの作法』という本がある。

共著で、一人は脳性まひ、一人はアスペルガー症候群。そして二人とも、自分という環世界を説明する力のある人

は大きい。

日本海新聞十月五日（火）

たちだ。外界の情報を、一人は過剰に受け入れすぎ、一人はそれを受容するのに、とても時間がかかる。つながり過ぎる人とながりにくい二人の「つながり」騒動の話だ。

二人は、何かしら自分たちは、普通の人たちとは違うと感じ、でもその「普通」って何だろうと考えはじめ。この手続のもと、いつの間にか、みんなの「つながり」の研究となる。コミュニケーションというのは双方あつてはじめて成立することがらなのに、実際はその限界を一方側のせいにしてしまう。ここがおかしいという結論に到達する。

人間は差異（一回一回のはじめてのような体験）と反復（くり返され人とも共有される体験）の中で生きる。多数の人は反復、つまりくり返しを習慣化し「すいすいモード」で生きている。二人の著者は差異の世界の緊張の中で、「あたふた」「ぐるぐる」モードに包まれ混乱して生きている。

当事者を主語とすることは、当たり前という思い込みの同調性から離れて、一人一人異なった、存在の一義性の方に身を寄せて主語とすることだ。述語は主語を理解するためにあるのだから、理解されるべきものは、ここでは一人一人の特殊性ということになる。考え抜くことによつて道を切り開く、その手助けとして「本」がある。

「誰ともつながっていない！」という苦しみから出発して、「普通」の仕組みをも解き明かしていく、この本の力

## 『「現成公按」を現成する』奥村正博 原著

・宮川敬之 訳 春秋社

「現成公按」というのは道元の名著『正法眼蔵』の冒頭の巻で、世俗の弟子のために記したともいわれる。つまり学びの基本が語られる。宮川敬之氏によつて翻訳され日本に伝来するこのテキストの意義は、氏によれば「世界基準」を実現したという一点にある。

入門に極意が秘められるとは、何かを極めようと志した人には周知の事実だ。「現成公按」は岩波文庫版でいえば八頁ほどしかない。この宮川訳の書物では三三二頁を費やして語られる。それは見えているものと見えていないものとを、縦横に織り上げるのに不可欠の分量だった。

どんな人に必要な書物なのだろう。修行を抜きがたく求める人の世界観がここにある。なぜ修行が必要か。見えるものの背後に見えないものの影を執拗に感じるからだ。そして「信」ではなく「論理」で解明したいというところに「世界基準」の知見がはじまる。本来宗教は「信」で事足りる。風土と伝統の包み込みがそこにあるからだ。しかしその風土が贈与する「信」に懐疑し海を渡って日本へ流

れてくる異国人がいる。そして、彼らのつながりでアメリカに禅センターができる。

宮川氏はこの本の解説で「信」という言葉を用いない。このテキストでは「学問的強度」がその代替をする。これは沢木興道―内山興道―奥村正博に一貫する姿勢だ。宮川氏は「座禅を根底にしながら学問的態度をもつて一般にわかりやすく伝える実践を行ってきた家風」という。このテキストはアメリカで英語を母語とする人たちと翻訳チームを結成し一語一語を吟味したものだ。多様な風土・伝統の中で生育したひとに届く、つまり世界基準の強度を完成した本なのだ。

その成果を宮川氏は逆輸入した。原著者奥村さんは、お伝えしなかったことは、沢木―内山に脈々と流れる「思いの手放し」と「生命実物」という発見だ。わたしたちは「見えるもの」に惑わされ「見えない」が本来重要な「生命実物」を忘却している。そのことよって苦しみの中にあるのならば、その誤った「思い」を手放せばいい。まず最初はその認識を確かなものとし読解や理解が必要となる。そしてここには幸い「座禅」がそのメソッドとしてある。

「見えるもの」と「見えないもの」が認識の視野に浮かぶ。大事なのはどちらだろう。じつは重要なのは「と」なのだ。このように「現成」のありようが展開するとき、こ

の知見は「事実」に密着するという衝動」「実在としての「潜在性」を追求する哲学の現在と重なりあい、認識の世界基準との同時性を共有することとなる。

山陰中央新報十月三十日（土）に掲載されたものの初稿。広く多くの人にわかりやすいように二回改稿したのですが、あえて、狭い範囲の人たちに向けた下書き初稿をここではとりあげています。

2021. 12. 21

定有堂教室「読む会」 (岩田直樹氏 選書)

毎月一回 火曜日 詳細は店内掲示

太極拳教室 (会場 定有堂二階 葉香クラブ (荷葉))

毎週 水曜 十九時半から ・土曜 十三時半から

講師 日本武術太極拳連盟 四段 公認A級指導員

# 『千年の読書』と「#千人の読書」

三砂 慶明

(「読書室」主宰)

ご縁があつて、誠文堂新光社という出版社から『千年の読書 人生を変える本との出会い』を上梓することとなりました。一生にそう何度もあることではないので、僭越ですが拙著について紹介させていただきます。

本書のタイトルは、大学で国文学を専攻していた妻が名づけてくれました。

この本を書いている途中に、京都に引越しました。家の近所に紫式部のお墓があつて、その前を通つて、いつも図書館に通つています。図書館に通う道すがら、紫式部のお墓にお参りに行った時に妻と雑談していました。妻が更級日記を例に、源氏物語は約千年前に書かれた物語であり、読書というものの本質は、昔も今も何ら変わることはないのだと教えてくれました。

『千年の読書』という本書のタイトルは、いささか大袈裟かもしれません。

でも、なぜ私たちの人生には本が必要なのか、を考えたときにこれ以上の言葉を見つけることはできませんでした。

この本を書かせてもらっているうちに、大切なことに気づくことができました。それは、私が自分の人生で大切にしたいことは一体なんなのか、です。

本書を書きすすめるうちに、自問自答しながらどりついた結論は単純に、良い仕事をしたい、ということでした。そして、家族とともに暮らす時間を大切にしたいという思いでした。

では私にとって具体的な良い仕事とは一体何なのか。

それを突き詰めて考えていくと、辿り着いたのが本と読書でした。私が妻とはじめた「読書室」は、ささやかな試みですが、これからの自分の大切な仕事だと考えています。自分がやりたいことを自分の言葉にしてみたら、はじめて自分が本当は何をしたかったのが明確になりました。他人から見たら、当たり前にかかと思えないことだと思いますが、恥ずかしながら、私はこんな当たり前のことにも気づいていなかったのです。

拙著でもこのことは書かせていただきましたが、私に最初の気づきを与えてくれたのが、定有堂書店でした。奈

良さんが手渡してくれた『自分の仕事をつくる』と『スモール・ハウス』を読み、考えるうちに、そうか、これから私たちが考えなければならぬのは、仕事と生活なんだとの気づきを得ることができました。

そして、私たちは働くために生きるのではなく、生きるために働くのだと、当たり前前に気づくことができました。

私は、良い本と出会うときはいつも、良い人にも出会っていました。まず、私が京都に住むきっかけをつくってくれたのは、開風社 待賢ブックセンターの鳥居さんでした。鳥居さんがユニークな不動産屋を紹介してくださったおかげで、今、住んでいる場所を見つけたことができました。私が定有堂書店の奈良さまとご縁をいただいたのは、濱崎洋三著『伝えたいこと』がきっかけでした。この本が入り口になって、鳥取をたずねることができたのは、私にとって、とても幸運なことでした。

私が拙著で紹介させていただいたのは、私の本棚の宝物です。書き終わって、今更ながら気づいたのは、本の後ろに人がいたという実感でした。私はいつも気づくのが遅いので、お恥ずかしいのですが、そのことに思い至った今、改めて、みなさまの本棚の宝物を教えてくださいたいと思う

ようになりました。

奈良さんにもご協力いただき拙著の刊行記念リーフレットを作らせていただきました。それが「千年売り続けたい本」です。個人的に尊敬し続けている全国各地の書店員の方十名に、ご自身の本棚の宝物を教えてくださいました。ご紹介いただいた推薦書の中には、もう新刊書店では手に入らない本もありますが、拙著とともに、どうかお近くの書店でお手にとつてご覧いただければ幸いです。

また拙著の発売日、一月十四日からTwitter上で、読者の皆様の本棚の宝物を教えてください、教えてください本を、梅田蔦屋書店の人文書棚で陳列販売する「#千人の読書」フェアを開催します。良かったら、

### #千人の読書

をつけて皆様の本棚の宝物を教えてください。三月末までの期間限定ですが、一緒に本棚をつくってみませんか？何卒よろしくお願い致します。

## 男性ブランコと鳥取と正体不明と

ワクサカソウヘイ

(文筆業)

私には、愛しい者が百人いる。

「百人にちよつとだけ依存することこそが自立」と言つて憚らない私であるが、しかし逆に言えば関わられる人数は百人が限界で、だから私はこの目に見えている百人のケツを持つただけに生きている。百人の友人が泣いていればすぐに飛んでいき、そつとハンカチを差し出す者でありたいと願っている。

さて、そんな百人の友人のうちの二人が、昨年に大ヒットを打った。芸人コンビ、男性ブランコだ。私は彼らのコントライブにおいて、構成作家として参加している。男性ブランコとはもう七年ほど友だちでもある。そして一緒に構成をしている大澤さんもまた、愛しい友人である。

彼らのコントライブは三秒で完売するほどの人気ぶりを

誇る現在であり、スケジュールもこの先ずつと真つ黒なわけだが、ついこの前までの私を含めた男性ブランコチームは四人とも暇で暇で仕方がなかった。すぐに深夜散歩に出かけたり、謎解きイベントに行ったり、二十四時間やっている中華屋で粥を啜りながらもなんでもない話を延々と喋ったりしていた。

あまりにも暇すぎて、私が滞在している鳥取は八東に男性ブランコを呼んだことがある。ちようど私と彼らが岡山で同じ現場の仕事があり、それが終わった後に、ちよつと鳥取に遊びに来ないかと誘つたら、二人とも来てくれたのである。時間だけはたつぷり持て余していたわけだ。

ちようどその時、地域では麒麟獅子祭りが開催されていて、彼らは狸々に追いかけまわされて本気でビビっていた。いまは東京で暮らしている私だが、先日に帰鳥(鳥取に帰ることをこう呼ぶ)した際に、不思議な感慨に囚われた。ああ、この地域にかつて男性ブランコは遊びに来てくれたんだなあ。浦井さんをバス停まで送ったり、平井さんを鳥取砂丘で降ろしたりしたなあ。

私はずつと、「なにをやっているのかよくわからない者」として他者から認識されている。それは当然で、男性ブランコの構成作家以外にも、九十九個の仕事をしているからだ。私の本質は百姓であるが、それを見抜ける人は少な

い。そして私は世間を煙に巻くことが趣味なので、正体不明のままの状態であることは自身にとつて非常に好ましい。でも、昨年にどかんと男性ブランコの「売れまくり」の旅が始まり、そして私はその旅の同行者として世間に認知されるようになり、鳥取でも「男性ブランコの作家さんですよね？」と声を掛けられるようになった。メディアの力は、本当に強大である。

私は鳥取のすべてが愛おしい。それは「なにをやっているのかよくわからない者」を、適当に放っておいてくれるエリアだからだ。鳥取は実にスルースキルが高い。他者に対して、強い干渉をしない。それはきつと、鳥取が全国でも名高き「少数人数国家」であることに由来しているからだと睨んでいるのだが、その辺りの詳細はまだ別の機会に考察したいと思う。

とにかく私は「なにをやっているのかよくわからない者」から「男性ブランコの構成作家」として見られるようになった。

さあ、鳥取よ。こんな私を、これからどうするつもりなのか。いままでと変わらず放っておくのか、それとも新しい干渉を行ってくるのか。どっちにしても、受けて立つ。パンデミックの最中、ずっと私に対して音信不通だった鳥取が、最近になってこちらに電波を送ってくるようになった。

た。断絶と接続を繰り返しながら、私は今日も鳥取を旅している。男性ブランコのシールを貼ったノートPCをカクタとタイピングしながら原稿を埋めていく東京の小さな部屋で、鳥取を旅している。

明日は誰から電話があるだろう。きっとそれは、愛しい百人のうちの一人に違いない。

# 汽水のほとりから (10)

小原 修治

(県立高校教諭 湯梨浜町松崎在住)

一年ほど前から琴浦町の篔津(のつ)にある河本家住宅で月末の第四日曜日に『論語』教室の講師をさせていただいている。河本家住宅は屋敷全体が国指定重要文化財になっている旧家だが、単に歴史が古いというにとどまらず、御先祖の高潔な志を継いで、その子孫の方々と多くの支援者による不断の努力により、『論語』教室のような古典を讀む会が長く続けられて来たという点において、特筆すべき場所だと思ふ。今回は、この貴重な文化遺産ともいふべき旧家に関する話題に取り上げ、最後に自身の夢を語つてみたい。

これまで河本家住宅について知ろうと思えば、五年前に出版された坂本敬司著『大庄屋と地域社会―八橋郡篔津村河本家文書が語るもの―』(鳥取県史ブックレット18)という小冊子が入手しやすく便利だった。が、この本は書名の通り、河本家の古文書を例に江戸時代の山陰地方の大

庄屋の仕事に焦点を当てたもので、最終章に少しだけ現在の様子についても触れられているが、河本家について網羅的に知ることのできる内容であるとは言えなかつた。ところが、半年ほど前に『河本家の歴史と家屋のすべて』(今井出版)という本が出版され、その過去から現在までの歩みを平易に理解できるようになった。これについては日本海新聞が写真入りで記事を掲載し、書評も同紙および山陰中央新報でも紹介されたから、ご存知の方もあろう。

この本は河本家保存会の名義で出されているが、実際は同会の会長を歴任して来られた小谷恵造先生(高校時代に警咳に接した関係から先生の呼称を使わせていただく)と同会の顧問である眞田廣幸氏による共著であり、前半部の「歴史」に関する記述を小谷先生が、後半部の「家屋」に関する記述を眞田氏がそれぞれ分担執筆している。なお、小谷先生は元県立高校の国語教師で、郷土の偉人の評伝を長年執筆された功績によって県文化功労賞を受賞された先達であり、眞田氏は元倉吉博物館の館長で、日本考古学協会や仏教芸術学会などに所属して精力的に多数の論文を発表してこられた学究の徒である。これ以上は望めない人選で、河本家に関する決定版が上梓されたと言えよう。

私自身この本を読んで初めて知り得たことが多かつた。とりわけ興味深かつたのは、『論語』教室の会場でもあ



る、対幅もおさまる広い床の間がしつらえられた母屋の客間に「稽古有文館」と大書され掛けられている扁額について、この場所で長く古典を講義して来られた小谷先生が次のように記されていたことであつた。先生曰く、私が初めてこの館号の扁額を仰ぎ見た時、「稽古有文館」とは「古典の勉強をして教養を身に付けるところ」という意味だろうと思われた。ただ「有文」の語に「教養を身に付ける」という意味が一向に見当らないことに落ち着かない思ひでいた。ところが後年、河本家の蔵書の中に『礼儀類典』のような貴重な稀覯本が、しかも全五百十五冊のうち一冊も缺けることなく收藏されているという事実を知るに及び、扁額に記された「有文館」とは「図書館」のことであると読めばよいと思うに至り、一切が納得できたのである。とつまり、「稽古有文館」とは「古典を学ぶための図書館」の意であり、河本家の歴大な蔵書は、この扁額が書かれた明治十三年以降、その目的で蒐集されたというのである。

京大学大学院博士課程の単位を取得した後、帰郷するにあたり、都会の研究者たちに負けぬよう、論文を書くのに必要な書籍を出来るだけ持ち帰った旨、その場で伺つた。河本家十四代の猷蔵氏も一高から東京帝大へと進んだ俊才で、先述の本によれば、同じ寮にいた和辻哲郎が後年記した「一高生活の思ひ出」という文章に「河本は鳥取の出で、方言は大して耳立ちはしなかつたが、わたくしどもの組でただ一人漢詩の作れる人であつた」と登場するが、「稽古有文館」と名付けられた私設図書館が自宅にあればこそ、帰郷にもやぶさかではなかつたのではと想像する。

規模は全く及ぶべくもないが、私もいつか私設図書館を作りたいという夢を抱いている。そこは河本家と同様に『論語』教室を催すことができるような学び舎でもあり、もつと気軽に読書会や映画鑑賞会などが楽しめる場所であつてもよい。奈良さんによれば、定有堂の読書会はもう三十年以上続いているそうである。そこまで長く継続するのは無理としても、せめて私設図書館開設から十年以上はそのような自由で開かれた活動を続けたいと考えている。

私設図書館。そう言えば、前回紹介した鳥取市の天徳寺の「寺市」に参加した折、宮川住職に案内されて座禅堂の脇に設置された書庫を拝見させてもらう機会に恵まれた。

そこには恐らく県立図書館も所蔵していない大蔵経全巻をはじめ、数多くの学術専門書が整然と書架に並べられ、まさに私設図書館と呼ぶにふさわしい空間だつた。住職は東

## 新聞は生き残れるか

萩原 俊郎

(倉吉市在住者)

今年の12月8日はちょうど太平洋戦争の開戦から80年。NHKで多くの特集番組が組まれていた。

「日本人はなぜ、あの無謀な戦争に突っ込んでいったのか」という内容が多かったが、一度動き出したら、上から「空気を読め！」と言われて口をつぐみ、便乗組や付度、お追従の輩が次々現れて、「もう、どうにも止まらない」の山本リンダになる(少々古いか)のは、何より今年の東京オリンピックを目の当たりにして、よく分かった。日本人は相も変わらず、なのである。そこを突いた番組は残念ながらなかった。

◇

◇

◇

かつて勤めていた新聞社は突然「姫路で新聞を出す」と言い出し、行き詰まると「次は大阪だ」と姫路にいた社員が全員大阪で新聞を作るようになった。ちょうど終戦記念

日の前だったので、会議で「ろくな準備もなく、これでは、中国戦線がダメなら南方戦線、という日本軍と同じではないか」と意見した。社内に反対論があることを経営者に伝えたかったからだが、議事録では見事に抹消され、翌月、私には大阪転勤が命じられた(こういうことは日本軍でもよくあったらしい)。

大阪は完全に資材と人員不足で(これも日本軍と同じ)、私は気を紛らわすためマンシヨンの雑居部屋で「近未来の新聞」を夢想し、時折寄稿していたコラムサイト(共同通信の経済部長が当時主宰)に送った。それが『ソニー』『エアボード』に新聞の未来を見た。日付は2001年4月、ちょうど20年前である。長いが一部引用する。

◇

◇

◇

### 日本橋で見つけた「未来」

未来の電子新聞(WEB新聞)らしきものを、先日、大阪日本橋の電気街で見つけた。ソニーが昨年末に発売した「エアボード」である。テレビもメールもインターネットも、すべてこの「移動式液晶テレビ」の画面上で、指でタッチして選べる。インターネット上ではニュース、天気予報、娯楽などの情報コンテンツが並び、それを選択する。もうすぐ、薄型軽量でビニールのように柔軟に曲げられる液晶画面も開発されるといふ。

電子新聞の内容は、アメリカのCNNが一番近いように思える。つまり映像と文字情報の同時提供(例えば、米大統領選で「ヘッドライン」をクリックすれば今日の主要テレビニュース、「ビデオ」で過去の公開テレビ討論のよう、「解説」で担当記者のコラムが読め、加えて各候補者の経歴、関連記事が次々引き出せる)。

そうしてみると、いざれ「ソニー傘下の情報コングロマリット」のようなものが生まれ、明治以来、情報産業の頂点に君臨してきた新聞は、コンテンツを提供する一部門に転落するかも知れない。すでにそのようなコングロマリットが生まれているアメリカ(タイム・ワーナーグループなど)などの外資の参入や、まったく異業種の産業からの殴り込みも予想される。

先日、全国紙にいる友人と話していて、「おれたちや鉄鋼や造船と同じく、斜陽産業に就職したのかも」とため息をついた。しかし混乱しているからこそ、新聞の「核の部分」、時代や人々から求められるものが見えてこないか…。

◇ ◇ ◇

かいつまんで紹介した。当たっているとところもあるし、エアボードみたいにズッコケたものもある(笑)。まあ、代わりに 아이폰をはじめスマホが世界を席巻したのだから、ある意味、当たっているのかも知れない。グーグルや

アマゾンなど情報コングロマリットも生まれた。

問題は新聞だ。当時から始まっていた記事提供のオンラインサービスで採算が取れているのは、NYタイムス、日経など世界でもほんの一部。9年前、米国の「投資の神様」ウォーレン・バフェットが「未来になっても地域の人々に生活情報は欠かせない」と全米63の地方紙を買収、ネット強化で経営建て直しに動きだし、大いに期待したものの、結局、全面撤退に終わったようだ。

「猫駅長」の発案者で、各地のバス・鉄道の再建に取り組んできた岡山・両備グループ代表の小嶋光信さんから昔こんな話を聞いて感銘を受けた。「経営者は不採算事業を長く放置してはいけない。金の問題ではなく、会社の命運を握る社員のモチベーションに関わるからだ」

時々思う。「大阪で費やしたエネルギーを社員の待遇改善と、少しでもいいから新聞の生き残りのために使えたのではないか」。自分がいた所を悪く言うものではない、と忠告してくれる人もいるが、たぶん、社内にいる昔の同僚や後輩たちは口が裂けても言えないだろうから、代わりに言う。

# 英語独習法をめぐる

松田 裕史

(高校教員)

約一年前、英語教育の研究者A(京大)は自身のブログで『英語独習法』(今井むつみ)という新書を取り上げていた。曰く、「いい本に出会いました。日頃学生さんに英語の学び方を解説する私にとっては非常に役立つ本です。その意味で、英語教師・英語教師志望の方々にはぜひお勧めします。また、自らの英語力を(CEFR)でいうならB2やC1のレベルまで)高めようとする方々にとっても、格好の学習の指針となる本だと思います。高い能力を求めめるなら、よい師を選ばねばなりません。この本はきつとよい師となるでしょう。」ウイトゲンシュタインなど言語哲学の視点から英語教育を語らせたならこの研究者Aの右に並ぶものではなく、私も長年私淑してきた。そのA氏がここまで称賛する本であれば読まねばならぬと思い、さっそく購入して読み進めた。(以後、半年くらいこの本は英語関連の書籍の中でベストセラーの常連であり、一般の新書を含め

てもよく売れた本の一つだった。)本の中では、英語スキーマを身につけるステップが重要とされている。(ことばのスキーマとは氷山の水面下にある、非常に複雑で豊かな知識のシステムのことである。)ステップは五段階から成り、次のように説明されている。「①自分が日本語スキーマを無意識に英語に当てはめていることを認識する。②英語の単語の意味を文脈から考え、さらにコーパスで単語の意味範囲を調べて、日本語で対応する単語の意味範囲や構文と比較する。③日本語と英語の単語の意味範囲や構文を比較することにより、日本語スキーマと食い違う、英語独自のスキーマを探すことを試みる。④スキーマのズレを意識しながらアウトプットの練習をする。構文のズレと単語の意味範囲のズレを両方意識し、英語のスキーマを自分で探索する。⑤英語のスキーマを意識しながらアウトプットの練習を続ける。」探索する、とはオンラインのコーパスを利用してその単語が使われる構文、その単語と共起する単語、その単語の使われる文脈、その単語の多義の構造、その単語の属する概念の意味ネットワークの知識等を調べることである。なるほど、SKILLやWordNetなど有用なコーパスが存在し、それらを使った練習問題も本書の最後に付されている。しかし、私にはパソコンを立ち上げてコーパスにアクセスし、探索するという行為が性に合わない。

合わないから持続もしない。せっかく究極の学習法が目の前にぶら下がっているのにそれをものにできない自分になんか少々がっかりしていた。そんな時、研究者B（中大）のブログに同書のことを次のように書かれていた。「本書で主張されている「合理的な学習法」は、一般の人よりいくらか英語教育に詳しい立場からすれば、さして目新しいものではない。」そして、次の三点が続けて記されていた。

①英語教育(研究)の知見が参照されていない。②批判されている授業や教育が藁人形的である。③英語母語話者規範主義的で、目標に照らしてバランスを欠く。「B氏は気鋭の英語教育研究者であり、言語教育の本質を突いた言説にはいつも唸らされる。同じ本をめぐってこども評価が分かれるのも珍しいが、どちらかが正しいということではなく、どちらにも一理ある。私としてはB氏の方に肩入れしてしまうのではあるが…」。

時々、生徒に英単語の覚え方を尋ねられることもある。個人的な経験を排して、単語帳を使った理論的裏付けのある方法を複数紹介することになっているが、紹介した後にも後ろめたさで背中がヒヤツとする。冷や汗もいつの間にか頬をつたう…。なぜか？ 自分自身、単語帳を使った学習が苦手なのだ。学生時代から一冊としてリスト型の単語帳を完遂したことはない。向いてないと言えばそれまで

だし、根気がないと指摘されればそれも否定できない。単語帳等を使ったリスト学習に効果があることは研究でも明らかだが、だとしても自分が苦手な方法を生徒に勧めの際の後ろめたさは消えることがない。

しかし、リスト型であれ多読型であれ大切な視点は異言語をどう「身体化」していくかである。その意味で、多和田葉子の次の言葉は極めて示唆的だ。「言葉を小説の書けるような形で記憶するためには、倉庫に次々木箱を運び入れるように記憶するのではだめで、新しい単語が元々蓄積されているいろいろな単語と血管で繋がらないといけない。しかも、一対一で繋がるわけではない。そのため、一個言葉が入るだけで、生命体全体に組み換えが起こりエネルギーの消費がすさまじい。」（『エクソフォニー』）母語の外へ出る旅〜）日本語、ドイツ語の両言語で世界トップレベルの小説を書き（『献灯使』は全米図書館賞の翻訳文学部門を受賞（2018））。日本の文学作品としては三六年ぶりの快挙。今や専門家の間では村上春樹よりもノーベル文学賞に近いと言われる多和田葉子。学習法はあれこれあり百家争鳴の感があるが、結局、私の場合いつも多和田葉子に戻ってくる。

# ヤポネシア⑩

島・人・数学

芝野 浩貴

(地球探査家)

「三徳山の投入堂に行きましたよ、あの張り付いた建築すべいですよね」と言われて、びっくりした。ここは石垣島である。距離的にも遠い

日本最南端から、人口が最も少ない鳥取に観光に来て、しかも中部地方を巡っている人に会う確率なんてかなり低いからだ。更に彼はこう言う。「今探究学習の係りをしている隠岐島のホームページなどで研究しているんです」と。これもまたびっくりした。沖縄に来る前に寄った島が隠岐島だったからだ。隠岐を訪問したのは3つ理由があった。

①遊歴高の研修が隠岐島で行われるので、生徒さんの激励をするため

②10年契約でどっしりと隠岐島に採用され、特に高校改革するために粉骨碎身で働いてる知人の激励

③隠岐島前高校の近くで開設された公立塾で働いている教え子の激励

①↓に関しては、事前学習がしっかりしており、私自身「隠岐と化学」、「隠岐と世界史」、「隠岐と古文書」など各教科とのコラボ授業を見学してから、「隠岐とA1」、「隠岐と数学」の授業をしてから臨んでいるので、半分は当事者としての参加であった。隠岐という「個別性」と数学という「普遍性」をどう結びつけるのかは難題である。事前学習では島前の3島はカルデラであるが、その中心をどうやって求めるか？(数学A図形の性質)

□4年のサイクルであわ(milled)、ひえ(barnyard millet)、小豆(redbeans)、麦(wheat)を輪作してるが、その場合の数は、

(条件設定で、重複順列や重複組合せなど問いが変わる数  
学A確率)

□島前のCASを活かすにはどんなロジスティクスを使えばいいか？(数学B数列、数学III微積分)現地では実際に生徒に会って、「日本の杉は人工林が多く、すらっとまっすぐだが、氷河期と隆起の繰り返りで、東北の杉も隠岐に逃げ込んだので、日本の天然林としては、多彩に枝分かれしている隠岐の杉がルーツだよ。」(島後の乳房杉、八百杉、かぶら杉)と会話したり、島の南の西郷岬から12キロ離れたトカゲ岩(26m)が視力いくらならなせ見えるのか？などの話をした。(トカゲ岩の前足は鳥取西部地震で壊れ

たらしい)

②に関して、現在隠岐高校勤務(島後)のY氏は、島前高校にも4年間勤務しており、隠岐島を知り尽くしているの  
で、色々質問してみた。

□隠岐島の沖津白波は、何故すぐに消えずに残っている  
のか？(沖縄などの珊瑚礁があるイノーでは、浅瀬で珊瑚  
礁にぶつかり白波は生じるがすぐに消える)

□CASを利用するのは島前だけなのか？(島後の那久  
岬から島前を眺めた時、その海峡が白いかの産地だと知り  
思った会ったびに活きる力を増すY氏(数学の教員)は前回  
は釣りの腕前を見せてくれたが、その後船の免許も取り、  
魚には不自由してないらしく、船乗りの経験として、風向  
と波高と潮流の関係の話をしてくれた。(三角関数)

③に関しては、隠岐学習センターのスタッフであるIター  
ン組の若者から、高校と公立塾がどう棲み分けているのかの  
話を聞いた。「学び祭」で地域探究に目覚めたKさんは、  
実際センターで子供たちに勉強を教えていたが、教えてい  
るうちに、教科単独授業では非力だと悟り、学び直すため  
に次の道に向かっていた。

そんなわけで、A先生(石垣島から投入堂に観光に来た  
数学の先生)には、いくらでも隠岐と石垣島を繋ぐよと話  
した。石垣島には観光でなく、プロボノとして八重山高校

で講義をするために行ったので、懇親会で数学の先生方  
にもてなしを受けたのである。

□世界三大数学者はアルキメデスとガウスとニュートン  
であるが、それ以外で講師陣の考える三大数学者を選んで  
くださいとか

□数学の三大定理はなんだと思いますか？

などの質問を受け、有意義な数学談義ができた。これは、  
地域の違いに寄らない普遍的な話である。

石垣島は、奄美大島や沖縄北島のように数千万年前から  
一度も沈んでない陸地で宮古島(音信不通54号)と違いハブ  
はいるし、パイナップルも採れる。島を離れる前に、バン  
ナ岳、御神崎、平久保崎を経て島を一周はした。山の多い  
石垣島にはダムが5個あり、宮古島とは違う。真水の配給  
塩も於茂登岳から名蔵川45キロに群生するマングローブ  
の植物と珊瑚礁のミネラルのブレンドとして精製するらし  
く、島によって様々である。にーふあいゆー、石垣島！  
那覇に戻ると、小笠原で研修している知人Aさんから、  
海亀・イルカ・鯨の生態やら、軽石のことなどのレポート  
が届いていた。

ムラカミヒロミ

(フライング・ブックマン)

みじかびのきやぶりにていればすぎちよびれ

すぎかきすらははっぱふみふみ

年配の方なら、ああ、と頷かれるだろう。

昭和四十年代のパイロット万年筆のCMである。用意された台本がまるでお話にならず、セツトも台詞も全て、その場で大橋巨泉が考えたアドリブであったそう。

当時、同社は左前で数百人のリストラ執行前であったが、このCMのお蔭で持ち直し、巨泉は社長からも組合委員長からも感謝されたと言う。元より意味は無く、ハナモゲラ語の元祖みたいなものだ。

ハナモゲラといえば、誰のエッセイだったか失念したが、ヨクチョンギレルハサミダ(韓国の焼肉で使う肉切バサミン・ル・サンカンシオン(春先の変わりやすい天気と言うフランス語)のふたつが紹介されていて、誠に秀逸であった。

落語の「らくだ」には、各ん坊の大家に通夜の酒食を出させるため、死人に「かんかんのう」を踊らせるぞ、と嫌がらせをやる場面がある。この「かんかんのう」も、仲々どうして不思議な歌だ。

「らくだ」は、明治の末頃に成立した噺というが、「かんかんのう」の歴史は更に古く、文政年間にまで遡る。「九連環」という清楽を、踊りを交えてアレンジし、上方で見世物として興行したのが始まり。馬琴が『曲亭雜記』で紹介しており、唐音(中国語)が分かり辛いので、通辞に解釈させた、とある。

それによれば、「かんかんのう」は「みよく」、「きうのれんす」は「久敷戀思ふ」、「きうれんす」は「久く戀たもふ」という按配で、終いには段々怪しからぬ意味になつてくるのが可笑しい。

元々は、九連環という知恵の輪が解くに解けない、といった他愛のない歌だったそうなのだが。(浅井忠夫『唐人唄と看々踊』)

唐音は、近松門左衛門の『国姓爺合戦』の中にも頻繁に出てくる。謀反が起きた明から皇女が逃れて来るが、





## 鳥取あれこれ その六十五

内田 克彦

(地域研究家)

「鳥取城ブーム」である。それでは、鳥取城はいづ、誰によつて出来たのか、と問われたら、答えるのに心もとないため、改めて調べてみることにした。

想い出すのは、一九八九(平成元)年度に開催された「鳥取市政100周年記念 市民大学講座」の中の「城下鳥取の成立」と題する浜崎洋三講師による講義である。例の浜崎節で「毎日久松山を見ながら通勤する中で、鳥取城はなぜ西を向いているか、と思った。」から始まった。そして、一九七八年『鳥取市史研究』3号所収の「鳥取城の成立について」論文(濱崎洋三著作集『伝えたいこと』定有堂書店刊に収録)を資料に使いながら論が進んだ。

天文十二年の秋の布施山名氏と但州系山名氏勢力との合戦に際して、但州系山名氏の戦略拠点として久松山麓の地が整備され、天文十四年の山名久通の進撃前までに、城としての整備築造が但州系山名氏によってなし終えられていたというのが、私の論である。

従来の論は『因幡民談記』の次の記述に拠っていた。

当地天神山の城郭は、山上低くして平城の如し、敵襲ひ来りても、防ぐべき要害なく、下は坦々たる平地なれば、敵を受けて支ゆべき地利なし、所詮此城の近辺に出城を拵へ定番を置き、敵寄せ来らば急ぎ布施へ注進し、或は鳥取にて之を支へ、或は千代川にて之を防ぎなば、敵争でか寄来るべき、是に勝る要害なしと、諸臣一同に評決し、此旨頻りに屋形に言上しければ、此趣最も可然とて、天文一四乙巳ノ年二月半に鋳初有て、邑美郡鳥取の郷久松の城を取立らる

例えば、一九六六年に発刊され、「久松山の「お城」の歴史をまとめた本はまだ世に出ておりません。」と書く、山根幸恵著『鳥取城』は、『因幡民談記』に拠っている。(なお、一九八三年に発刊の、同じく山根幸恵編著の『定本 鳥取城』には、城戸久・松岡利郎著「鳥取城天主および三階櫓の考察」、福井淳人編「鳥取城関連資料集」が加わっているものの、そのほかは前著の記述のまま「鳥取城の城主」の項を加えており、福井は「本書では、これ(近年提唱された浜崎の論)に対する充分な検討がなされていない」と書いている。)

また、一九七〇年に発刊された、山根著『鳥取城問答』（鳥取城ロープウエー株）、非売品）も、やはり同様な記述である。

さらに、一九八二年に発刊の『日本地名大辞典31鳥取県』（角川書店）では、次の記述である。

久松山に鳥取城が布施天神山城の山名氏の出城として築かれたのは天文14年2月

一方、一九九二年に発刊の『鳥取県の地名 日本歴史地名大系32』（平凡社）では、次の記述である。

天文年間布施天神山城に拠る因幡山名氏と但馬山名氏の争いのなかで築城されたとする説が一般に認められているが、そのどちらが実際に城を築いたかについては見解が分れる。

最近の記述はどうか。二〇一八年発刊の『史跡鳥取城附太閤ヶ成発掘調査報告書Ⅳ』は次のとおりである。

土造りの鳥取城の起源は明確ではないが天文年間（16世紀中頃）に遡るとされる。鳥取城の所在する因幡は、

西の伯耆、東の但馬と共に南北朝期以来、代々山名一族が守護職を継承してきた。勢力拡大を図る出雲尼子氏の支配下にあった因幡屋形山名誠通は、惣領家である但馬守護山名祐豊と支配権を巡り鋭く対立し、鳥取城はその過程で戦略的拠点として誕生したと考えられている。

なお、とっとり観光ガイド友の会「きなんせい家」で無料配布している冊子『国指定史跡 日本百名城 鳥取城跡』（鳥取市教育委員会）でも、「城は、16世紀中頃、守護大名山名氏一族の争いの過程で誕生しました。」とあり、同様の記述である。

要するに、従前どおり『因幡民談記』に拠り布施天神山城の出城として築かれたとする説と、それには根拠が示されていないため、他の史料と併せて検討の上、但馬系山名氏勢力により、布施屋形（天神山城）に対する戦略的拠点として久松山麓にまず築かれたのではないかとする説との決着がまだ着いていないのである。

とはいえ、『尼子氏と戦国時代の鳥取』では、天文一四年四月を最後に、因幡守護山名久通の名が確認できなくなるため、この頃には久通は没落したものとされている。

（以下、続く）

二〇二二・一一・二二

# 八代日記 (二十二)

齊藤 仁昭

(元長崎書店)

十二月某日

あんまり胃が痛いので病院へ。胃酸の量を抑える薬と、胃の粘膜保護剤をもらう。効果ばつちりで胸焼けと胃痛が軽減。が、同時に食欲も落ち、何よりラーメンを食べたいという欲望が湧いてこなくなつた。さみしい気もするが、健康にはありがたいのかも。体の変化。中年への変化と、まく楽しく付き合つていこう。

そんなだったので昼食はしばらく蕎麦ばかり食べていたが、胃の調子がだいぶ良い日に天丼をたのんだ。天丼を食べるときは頭の中が孤独のグルメの状態で、どれをどんな順で、米と天ぷらをどうというバランスで食べ進めていくのかを考え続けてしまうのだけど、そういう考えはなんだか浅ましいような気もして、ではいったいスマートな天丼の食べ方ってどうすればいいのだろうか、と悩みながら食べ終わるので、消化に悪い。

十二月某日

恒例のクリスマス激務。去年よりはマシな労働時間で済んだ。それでも5時出勤だったので配達中の運転が眠すぎで、レンタルした配送車に車線はみ出しアラートが付いていなかったらやばかった。

あとは皆さんにおいしく召し上がっていただけたことを祈るばかり。

十二月某日

ブルータスの村上春樹特集を遅ればせながら読む。かなりの文章を村上が書いていて、楽しい特集だった。ブルータスはやっぱりいつもすごいと思う。

十二月某日

『ミュージックマガジン』2022年1月号「ベスト・アルバム2021」特集で、湯浅学氏がケバブジョンソンのニューアルバムを個人ベスト10に入れてくださったっていると友人よりメールあり。ありがとうございます。早速八代の書店に買い求めたが、2軒行ったどちらにも置いていなかった。だからまだ実際に読んでいない。

\*\*\*\*\*

点滅する信号で止まる

現在地を携帯で探す

正面から背面に動く

電信柱が連続する

炎天下の街道に浮かぶ

高濃度の排ガスに揺れる

In Tempo で分割がされる

ハイエンドな住宅が並ぶ

ミニバン巡回バスが走る

軽トラワンボックスが急ぐ

とにかくまっすぐに走れなくなる

とにかくまっすぐに走れなくなる

次のカーブを曲がれ

救急車のサイレンが止まる

パーキングでエンジンが響く

スピーカーから音楽が漏れる

Beatbox が脳波を乗り継ぐ

平坦から勾配を下る

川沿い公園を突き抜ける

ダンブとタクシーが走り去る

原チャリパトカーが追いかける

とにかくまっすぐに走れなくなる

とにかくまっすぐに走れなくなる

次のカーブを曲がれ

青緑の陸橋をくぐる

際限なく看板が増える

交錯する電灯が照らす

アスファルトの凹凸を避ける

秒刻みで濃淡を変える

高架下のランプがチラつく

開いてるのはラーメン屋だけだ

混濁したラーメン屋だけだ

考えると瞳孔が開く

解像度が急激に落ちる

とにかくまっすぐに走れなくなる

とにかくまっすぐに走れなくなる

次のカーブを曲がれ

(ケバブジョンソン「カーブを曲がれ」作詞…杉浦真寛)

# 山椒魚とヴァイオラ

秦阜 梅林

(楽人)

## I 「アンサンブルとヴァイオラ」

ヴァイオラと云ふ楽器(以下「V」)は一見地味な存在。オーケストラの中音域をクラリネットと共に担ひ、主旋律を歌ふヴァイオリン(以下「E」)チェロ(C)管楽器などのハーモニーを微妙にブレンドし、音量のヴァランスを整へ、テムポを支へ、キープか?動かすか?状況を窺つてゐる:野球で云ふとさしずめ二遊間といったところ、実はスリリングなアンサンブルの要なのである。

管弦楽や室内楽の一見如何にも平和さうで「長閑に感じらる」古典作品の「パッセージを奏でて居る時」も「絶へず水面下で全体を聴きつ」神経を尖らせてる。

このセクションにたいして注意を向けなひ(大抵はピアニスト上がりの)凡庸な指揮者は管弦楽を大雑把にしか捉へておらず、誰とは言はなひがスター指揮者の中にもさういふ輩は居る、其れも少なからず。

## II 「ヴァイオラと云ふ楽器」

Vは滅多に演奏中、弦が切れると言ふ事が無い:(大抵は切れなひで弛む)何故か?

同族中の「F」,「C」がかなりの高圧で弦ヲピン!と張つて居るのに対して「V」のそれは随分緩く巻かれているから。そして緊張感に欠けるやうな音質はコントラバス(Cb)共に刺々しひ場を和らげる。

更に「H」,「Vc」と較べると「V」は其の音域に対し胴体の大きさ、容積が小さな故に籠つた、所謂「鼻にかかったやうな」独特な響きになつてゐる。あれ以上大きくなるともはやこのスタイルで演奏する事が不可能になつて了ふのだ。

そんな訳で、前回書ひたやうに音色的な観点から山椒魚の性格表現に僕は敢へて「V」を充てた…

## III 「無伴奏 V と H とジャンル」

当初から、「山椒魚」の音楽は「V」:其れも無伴奏:と言ふイメージがあつて書き始めたのだが、実は途中夏頃に演出からのオーダーもあり、亦僕自身「解り易く」なるかな?とピアノ(Pf)伴奏付きの異版を書きはじめ

たのだが、作業が進むに連れて此の試案には違和感計り感じ、イメージから遠くなるわ、効果上がらないわで早々自らボツにしてしまった。

斯くしてこの芝居に、無伴奏Vlaと云ふ現行のユニークな編成が形を為した。

抑、僕は此れ迄も、「無伴奏Vla」と云ふジャンルは、他の弦楽器に較べ極端に名作が乏しひ※1(M.レーガーやP. Hindemithに数少なひ例外有り)と云ふ理由もあつて特別な拘りをもつて永年書き連ねて来た分野ではあるし、芝居とのコラボも少なくなつた…が。全篇に渡り※2(例外的に、鍵盤楽器を奏でるナンバーを除く)それだけ!と云ふのは初の試みである。

後々、此の舞台から離れ、絶対的抽象、つまり独立した室内楽作品として「山椒魚組曲」的なものを編むことも考へなくなひが其れはさておき、今回の舞台で、2人の役者と絡む以上…有り様としては厳密な意味での無伴奏では無ひ。

亦、舞台作品としては、声や演技に伴ふ音とのコンビネーションやらヴァランスも微妙ではある…が、Vlaの音は、(Cbあるひはファゴットとも通じるが)いったひ声とはケンカしなひ。よく馴染む方であるが、逆に音が「立たなひ」と云ふ問題が浮上して来る…

そんな訳で作家としては自然と「良く鳴るやう」な書法許りを選ぶ事に成る…此処に、予期せぬ作品の弱さが稽古を重ねるうち徐々に露呈して困つた事になつて了つた…。鳴るやうに書いたパッセージは当然、役者の声を圧して了ふ、本末転倒である…。さて此処からは現場の仕事。本番、会場の響きにも掛かつて来る、…不安は楽しみを伴ふ類の其れではある…云々

2021. 12. 10

※1 M.レーガー3つの無伴奏Vla組曲作品131d  
(1915) P. Hindemith無伴奏Vlaソナタ(作品11/5  
など4曲)



イラスト 秦阜梅林

# しかく

森本 龍哉

(鳥取大学地域学部4回生)

ステージがある遊戯室、その園庭に面した掃きだし窓の近くには、私たちの小さなカバンがずらりと並んでいた。迎えが来るまでそれぞれ園庭で遊び、迎えが来れば自分のカバンを手にしてここをあとにする。電気が消え、夕陽がふたりだけの遊戯室の輪郭をつくるなか、私はその子にレモンティーをもらった。そのときの私は人生ではじめてレモンティーという飲み物を飲んだことになる。でもたぶん、そのときはそれがレモンティーだと知らなかったにちがいない。いまになってあのときのあの味はレモンティーだったにちがいないと、忘れられない味。

その子の黄色い水筒はコップがついたもので、私の水筒もコップがついたものだった。その子は私の水筒のコップに、その琥珀色の液体をそそいでくれた。誰にも気づかれないように、こっそりと。いけないことをしている、そんな

な感覚をおぼえている。あまい味の飲み物を水筒に持ってきてはいけないというようななか、はじめて飲んだそれは本当においしく、こんなにおいしい飲み物があるのかと幼心に感動したことをはつきりとおぼえていて、その後その味を超えるレモンティーに出会えていない。その子とは、しばらくして会えなくなった。

そのころの私は自分の靴だけでなく、ほかの子の靴もそろえていたと、最近になって知らされる。そのことを私はおぼえていなくて、そのころのことではつきりとおぼえていることは少ない。おぼえているのはレモンティーのことと、たとえばスパゲッティのこと。昼食のメニューを遊戯室の隅から何人かの子たちと先生と一緒に放送しなければならなかった。何度か昼食に登場するスパゲッティ。そして何度も私はその「スパゲッティ」という言葉をマイクに向かってつぶやかなければならなかった。でも、うまく言えなかった。何度やつても「スパゲッティ」の「ティ」が「チイ」になってしまう。私は悔しくて涙を流した。なぜ言えないのか、わからなかった。当時の私の切実な敵はテレビ画面の向こうで殴られたり蹴られたりしている悪役ではなく、すぐそばのスパゲッティだったのかもしれない。

または映画館のロビーにつづく廊下。その廊下の両手の壁にはさまざまな映画のポスターがびっしりと並んで



いて、そのポスターのなかから降りそそがれる視線に耐えられず、おとなの手を握り床を見ながらどうにか歩いていく。それでもやがて耐えられなくなり「帰る」と泣きそうになりながら映画を見ることなく引き返した。そうしたこととが私の世界のすべてだった。

ほとんど泣けなくなってしまったことが悲しく、冬の雨が降る誰もいないような駐車場に私は入る。「スパゲッテイ」と何度でも言えるようになった。あの廊下もこわくなく、水筒にはなんでも入れていい。レバーをドライブからリバーズに入れ、下がっていく。でも左ドアミラーの濡れたアスファルトに小さな鳥を見つけ、ブレーキペダルを踏んで停止する。ぴいぴいとリバーズ音を鳴らしたまま、ミラー越しに車体のすぐそばをひとりで歩くその姿を見つめる。白い小鳥、ハクセキレイだろうか。もし、この車内のリバーズ音が聞こえて近くにやってきたとしたらと思うと、胸のあたりが少しきゅつとなる。私はもう1度ドライブに入れ、ゆつくりと前進して駐車位置を変えることにした。

その後、インフルエンザの予防接種。おいが変わらないここには1年ごとに訪れ、「今年もこの季節がやってきましたね」とマスク越しのその人に案内され打つ注射は、これまででもっとも痛くない。打ってもらったときも、そのあとも。痛みがなくて忘れてしまいそうな、左腕の小さ

な正方形。

誰かの靴をそろえていた記憶はない。私がそろえていた誰かの靴は、きつともうなくなっている。あの子のレモンティーが入った水筒のことを、いまもおぼえている人はいるのだろうか。いま、あの子のことは私の知らない誰かが知っていて、あの子は私がついている誰かを知らない。冬の雨が降る駐車場で歩いていたら小鳥は、どこでまた眠るのだろうか。私は注射したばかりの左腕を少し気にするよ

うに、右腕を下にして目を閉じることになると思う。

# 拝啓、わたし

三浦 永理

(二十七歳・女性・教員)

毎日、寒い日々ですが、いかがお過ごしですか？

ずっと誰かと「あなたのことを思っていますよ」と伝えるために、文通をしたいと思っていたのですが、ふと自分に書いてみようと思いついたんです。

鳥取に来てからの日々は、「不通」を感じる日々でもありました。

元からの知り合いが誰もいない中、コロナ禍となり、かつて繋がっていた人々は夢の中の登場人物になりました。そんな日々を重ねていると、久しぶりに話すかつての友人達と、自分の見ている世界があまりにも違うことを実感するのです。確かに、私たちは特殊な環境で育ちました。ミッシェン系の学校に行き、当たり前のように大学に進学しました。それは決して世の中の当たり前ではないと身をもつ

て感じていますが、それが私たちの体験した世界の現実だとも言え、同じような環境の友人、大学の知り合いとは共感することも多く、居心地が良かったのです。ですが、久しぶりに会うと、かつては共感し合っていた友人達と、少しずつズレが生まれているように思えてなりません。それは私がこの歳で鳥取に単身で来て、大都會の論理とわからなくなっているからかもしれません。

友人達は結婚していきます。友人達は家族を作っていきます。友人達はキャリアアップを目指して、都会での仕事にこだわります。

果たして、私たちはどうするのでしょうか。

私たちは結婚することにも、家族のあり方にもあまりこだわっていません。どんな仕事をするかというより、私たちは人生を通して何のために行動するのかを探し続けています。友人達は必要に迫られ、家族と向き合いながら生きていくのにもかかわらず、私たちはその責任から逃げて、子供じみた想いに向き合っています。

一方で、私は子供時代を取り戻しているのだとも思うのです。

ずっと家族の顔や、先生の顔を窺って、いい顔をしてきた私が、「すべき」ではなく、「したい」を探すにはそれなりの時間と、彼らからの物理的距離が必要だったのだと。その作業は孤独ですし、決まりきった答えもありません。自分で答えを作らなくてはなりません。私はその答えと「不通」なのです。

それでも、今こそが考えるチャンスだと、自分に正直にいれるチャンスなのだと思うのです。

自分で「子供時代を取り戻している」と表現して、最近私が高校時代の自分——人生で一番自分から机に向かう時間が長かった受験期——のように一心不乱に生きていくことに気づきました。どんなに真つ直ぐに生きようと思っても邪魔をしてきた邪念が、今はあまりありません。人と違うことを本当に受け入れたのか、孤独であつてもその作業を愛しているからなのか。

ただ単にいろいろな誘惑から距離ができたせいだとも思えます。大都会から離れ、あらゆる広告から身を置いていくせい、世の中の流行りを知らないままに過ごせるのが鳥取での生活の一面だと思うのです。だからこそ、私一人に対して真摯に向き合えるのだと。

鳥取に来る前、私の言葉はどこにでもある言葉でした。誰かに尊重されることばかりではなく、「社員でもないあなたが言っても意味がないのよ」と言われていたように思う日々が続いていたのです。それが今や細々とこの場で、あるいは職場で、自分の言葉が人に聞かれるもの、尊重されるものになったことは奇妙なものです。それはひとえに、私がこの街でこの仕事についたからだと思えます。甘んじてはいけなйдらうと思えます。自分のことを安く売ってしまうえば、また私の言葉は軽々しく無視されてしまうものになりますから。

もう二度と自分の言葉を安くは売らないと、聞かれないものにはしないと。そうやって人生を進めたいのです。

そういえば、あなたに手紙を書いたのは中学三年以来のことでした。その時は「自分しか頼る相手はいない」と言ったのですが、決してそうではないと思えます。

頼る相手を増やして、もつと楽に生きるのよ。私たちの声が聞かれるものであり続けるために。そうあなたと約束したいと思えます。

# カエル姫 その二



## ドラメリア

(座敷わらし)

この年末は帰省することになった。コロナウイルス流行前の一昨年の冬以来、二年ぶりとなる。姉家族も同時に帰省するので、さて今度は姪に何の本を贈ろうかと考えていたところ、姉を通して本人からリクエストがあった。「カエル」のことがなるべくくわしく載っている本がいいらしい。好みが一貫していて、わかりやすくてよらしい。

揺るぎない好みのカエル姫だが、本人は虫も大好きだ。友達と公園に遊びに出かけると、ひとり離れて蛾の幼虫を拾ったりしているらしい。夏頃にはお気に入り毛虫たちを指に這わせたツーショット動画を送ってきてくれた。黒々ふさふさ系、毒々カラフル系。長い名前もすらすら覚えてそれぞれの性格(！)について楽しげに解説してくれたが、叔母さんはおそろしくて直視できなかった。

先日、授業で『堤中納言物語』を生徒に紹介する機会があった。原典はハードルが高いので、詩人の蜂飼耳が現代

語訳した光文社古典新訳文庫のもの。この中の一編に「虫めづる姫君」がある。「あたしは虫が好き」というタイトルのその物語では、化粧やおしゃれには見向きもせず、喜々として虫を集める「元祖虫ガール」の姫君の姿が描かれていて、その生き生きした姿に姪っ子が重なる。この前学校で一人ずつ啓発ポスターを描いたときは、他の子たちが「あいさつをしよう」「みんな仲よく」などごくまっとうな小学生らしいものを作る中、「みなさんはカエルを大切にしていますか?」という斜め上なコピーを付けて、異彩を放っていたような。

しかしちよつと聞きたい。虫とカエルって天敵ではないのか。



・編集後記:

寒波到来。数年前の大雪のときに買った最強の長靴がふたたび活躍しました。膝を超す雪に対応できるこの長靴、次に出すのは何年後でしょう。      ドラメリア (編集長)

「当事者」と本屋という視点を考えています。本屋が生業として成り立ちにくい現実の中に、本屋は新しい形態として生まれています。当事者としての本屋は多様ですが、まだ言葉ではとらえきれないようです。      奈良敏行 (発行人)